

中学生のソーシャルスキルと学校生活満足度 との関連について

—不登校の予防を目指して—

学籍番号 209214
氏名 三井 康司
主指導教員 庭山 和貴
副指導教員 柿 慶子

1. 背景

文部科学省（2022）の令和3年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、小・中学校における不登校児童生徒数は244,940人（前年度196,127人）であり、前年度から48,813人（24.8%）増加した。長期欠席者（年間30日以上欠席）の割合は、小学校で77人に1人、中学校では20人に1人存在する。中学校段階では学習に加え、健康維持、コミュニケーションに関するスキルが不登校傾向と関連することが報告されている（五十嵐, 2011）。また、渡辺・内野(2009)はコミュニケーションスキルを自己主張・他者受容の二次元から捉え、両者が学校適応感と高く関連していること、特に「友人関係適応感」と「学習活動適応感」においてその傾向が顕著なことを明らかにした。本実践研究では、主に不登校生徒や、学校適応感に困難を抱える生徒への支援策を講じた中で、実習校が採用しているhyper-QUを活用して、学校生活満足度と生徒のソーシャルスキルの関連性について調査し、さらにこれらの向上を目指したものである。

2. 実践研究I：基本学校実習の取り組み

基本学校実習 I では、生徒の実態把握に努めた。学校・クラス内の生徒を観察することで、生徒が求め、取り組もうとしていることを把握することができた。観察の結果、人とのかかわりに困難を示している生徒は、対人関係において言葉ではなく、身体接触におけるかかわりが他の生徒より多いことも明らかとなった。また、畑作業やオセロや将棋大会、班ノートを活用し、生徒同士、教員と生徒の交流を深めることに努めた。総合的学習の時間においては、ピアサポートの活動を通じて、問題解決を通じての人間関係の構築の支援にあたった。

基本学校実習 II では、hyper-QU のソーシャルスキル尺度と学校生活意欲尺度および、学級満足度尺度の関連性を分析した。特に学級満足度および学校生活意欲尺度との関連性が強かったソーシャルスキルについて日常場面における生徒の行動観察の結果も加味した上で、ソーシャルスキルトレーニング（「状況理解スキル」「表現スキル」）を立案し、実施することができた。

3. 実践研究II：発展課題実習Iの取り組み

発展課題実習 I では、hyper-QU による、ソーシャルスキル尺度における「配慮」スキルと「かかわり」スキルの得点と、「承認」「被侵害」「友人とのかかわり」得点との相関関係の調査を行った。そして、日常場面における生徒の行動観察の結果を踏まえ、「かかわり」スキルの中でも、自分も相手も大切にしたい「自己尊重の自己表現」アサーショントレーニングを立案し、学校全体に向けて、研究授業を実施した。さらに、hyper-QU の結果も参考にしながら生徒の行動を教員間で共有し生徒理解を深めるとともに指導の手立てや接し方を検討した。

また不登校生徒対応策として実習校の「Tomorrow Room」の創設に携わった。登校すると教室ではなく、「TM Room」内の個別ブース内で学習を行い、学年教員との面談（主に、その日の計画（勉強する教科、帰宅時間等））を可能とするものである。「TM Room」がどのような効果をもたらしたのかを、担当学年の不登校生徒 3 名の昨年度との出席率の変化を通じて、調査した。

5. 実践研究III：発展課題実習II取り組み

「自己尊重の自己表現・自己理解」アサーショントレーニングを 2 度実施した。

最初の授業では、「み（見たこと）・かん（感じたこと）・てい（提案）・いな（否定された時の代案）」法を使い、自分の気持ちを素直に伝え、相手の協力を引き出す話法を学んだ。そして普段の生活で起こりうる場面を設定し、ロールプレイを行った。また 2 回目授業では、「私はどんな人？」20 答法を用いた自己理解を深めた。そして、グループ内の他者から自己の存在を承認され、自然と会話が生まれた結果、友人とのかかわりが増えた。また、個別に気になる生徒と面談を行い、困り感を把握し、個々のアドバイスをを行った。その結果を踏まえ、12 月の hyper-QU のアンケート調査を参考に 4 月の調査から 12 月にかけて承認得点、被侵害得点の学年平均の変化や、「かかわり」スキルの学年平均の変化、「かかわり」スキルが 25 点以下の生徒の得点の推移を調べた。また、実習校の TM Room 導入により、不登校生徒 3 名の出席率に大きな変化が生まれた。特に、10 月～3 月にかけては卒業を控え、3 名とも出席率上昇傾向が見られた。

6. 総合考察

本実践研究では、学校、学級に適応困難な所属学年在籍の様々なニーズを抱える生徒とかかわり、観察することで一人ひとりの援助ニーズを把握することができた。また、不登校生徒と接する中で、困り感を理解し、支援策を学年で協議できた点も非常に有意義であった。担当学年においては、hyper-QU の調査結果、日常場面における生徒の行動観察の結果を加味した上で、SST（「状況理解スキル」「自己尊重の表現スキル」）を実施した。これらのトレーニングを通じて、「かかわり」スキルの向上を目指し、彼らの学校生活満足度の向上に繋げることが出来た。また実習校で導入した「TM Room」により、不登校生 3 名の出席率の向上が見られ、不登校対策として、大きな効果をもたらした。